法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

日本近代文学史研究の基礎確立者 : 片岡良一の仕事について

小田切, 秀雄 / ODAGIRI, Hideo

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
1959-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018956

日本近代文学史研究の基礎確立者

――片岡良一の仕事について――

小田切秀雄

日本近代文学研究の歴史は、明治二六、七年ごろからはじまると見ればもはや今年で六〇余年になる。明治二六、七年というのは、北村透谷の『明治文学管見』という未完の文章（『評論』誌上に連載）が二六年で、大和田建樹の単行本『明治文学史』（博文館）が二七年だからである。この両者は、日本近代文学についての歴史的な評論ないし研究として最初のものであり、ことに透谷のは、その当時の〝現代文学〟にたいする根本的な歴史的検討への着手として、文学史的研究の本来のモチーフに貫かれた画期的なものであるが、入り口をふみかためただけで終っているのがおしい。これにたいして大和田のは、明治初年から刊行時までの文学現象の一応の歴史的分類と羅列というだけのもので、かれの文学観念自体がきわめて粗雑浅薄なものであったから、文学現象の選択や説明や序列のつけ方やのすべてにわたって粗雑浅薄であり、わるい意味でのジャーナリスティックな速製本であった。大和田はそのころの国文学ブックメーカーであった。もっとも、当時は世間が文学をこういうふうに見ていたのだな、これでは二葉亭四迷や北村透谷はまったくやり切れない気持だったろう、ということなどを考えさせる役には立つ本である。この本が出たころは透谷はすでにその活動を終っていたが、透谷のことなどこの本ではまったく問題にされていない。のちに片岡良一がくりかえしのべたように、透谷をどう位置づけるかは、日本近代文学史叙述においての試金石であるのに。

日本近代文学史研究の歴史はこういうところからはじまった。引続いて高山樗牛の『明治の小説』（三〇年六月『太陽』）が出、また自然主義による日本近代文学の一応の確立に伴って高橋淡水の『時代文学史』（三九年、開発社）、岩城準太郎の『明治文学史』（同年、育英社）芳賀矢一の『明治文学』（四二年、共著『開国五十年史』所収）等が出た。自然主義の文芸評論家およびそれに近い場所にいた国文学者の間からも、相馬御風らの『日本現代文学』（四二年、早稲田文学社編『文芸百科全書』の一部。隆文館刊）や、田山花袋らの『明治文学の概観』（大正一一年、『文章世界』増刊号の

一冊全部）、また五十嵐力の『新国文学史』（明治四五年、早稲田大学出版部）の巻頭約七〇頁にわたる『明治の文学と明治以前の文学』、等々が生れた。自然主義の文学イデオローグであった花袋や御風の文学史的構図（史的構想と評価の体系）は、その一貫性と自然主義者なりに地についた近代的文学観念と早稲田的な資料的実証性とによって、その後の日本近代文学史叙述の基礎をつくることになった。――戦後の今でこそ、近代文学史と現代文学史との間には一応のけじめがつけられているが、明治末年の自然主義時代にはまだ近代文学史はそのまま現代文学史であって、近代文学を論ずることと現代文学を論ずることとは同じことであった。したがって、現役の文芸評論家がまた文学史叙述にも当るのが最も有効でかつ自然な成り行きであり、国学的文学観念が支配的であった当時のいわゆる国文学者たちにとっては、近代文学（当時の現代文学）はまったく取扱いがたい異物にほかならなかった。わずかに岩城準太郎のようなひとが、そのころまでの文芸評論家たちによる具体的な作品評価に篤実に依拠しまた整理して前掲の『明治文学史』を書き、国文学者の手による日本近代文学史叙述の最初の着実な達成となったが、もともとそういう篤実な努力のゆえに国学的観念の規制からかなりに自由になりえたのであり、そういうひとによってのみ研究者としての近代文学史叙述が可能となったのである。

以上に略述した経過から知られるように、日本近代文学史の研究はもともと現代文芸評論と同一ないしそれに近いものとして成立してきた。大正期に書かれた日本近代文学史叙述としての相馬御風『明治文学講話』（三年、日本文章学院『文章講義録』の一部。のち、六年、新潮社刊『文学百科精講』で増補）、高須梅溪『近代文芸史論』（一〇年、日本評論社）、田山花袋『近代の小説』（一二年、近代文明社）、小島政二郎『明治小説史』（一三年、文芸春秋社『文芸講座』）、小島徳弥『明治大正・新文学史観』（一四年、教文社）、宮島新三郎『明治文学十二講』（一四年、新詩壇社）、加藤武雄『明治大正文学の輪廓』（一五年、新潮社）、宮島新三郎『大正文学十四講』（一五年、新詩壇社）、等々、いずれも文芸評論家ないし作家が書いたものであり、文芸評論家や作家とは一応別個のものとしての近代文学史専門研究者というものはまだ生れていなかった。こういう専門家が生れるようになったのは昭和期に入る前後からであって、『早稲田文学』が「明治文学研究号」を大正一四年三月・六月・七月および一五年一月・四月、昭和二年四月・六月の計七回にわたって刊行したことは、そういう新しい研究動向を示すものにほかならなかった。プロレタリア文学運動と新感覚派運動との成立を中心に日本近代文学が一つの大きな転換を経験しはじめたときに、それまでの日本近代文学の歴史の回顧や検討が行われたのは自然のなりゆきで、昭和への改元と同時に『文章倶楽部』が大正文学検討特集号を出したのなども同一の衝動によったことであった。『早稲田文学』の「明治文学研究号」は、当時の現存者たちによる往年の自己の文学的活動の回顧と、木村毅・本間久雄・柳田泉・宮島新三郎・日夏耿之介・斎藤昌三・河竹繁俊らによる研究論文とから成っていて、木村らはまた新潮社版『日本文学講座』（この種のものとして最初。大正一五―昭和三年刊）のうちの近代文学史関係の執筆者でもあった。

演劇史関係の河竹繁俊、詩史関係の日夏耿之介は一応べつとして、右の木村・本間・柳田・斎藤は専門の日本近代文学研究者として

最初に登場したひとびとであった。本間は大正初年には文芸評論家として活動していたが、この時期いらい主として日本近代文学研究者として仕事をするようになったひとである。これらのひとびとは、坪内逍遙の「没理想論」いらい自然主義にいたる早稲田大学の実証主義的傾向（それは、観念とその演繹とを主とする明治期東大のアカデミズムにたいして、在野的民衆的な傾向を示すものでもあった）を受けつぎ、日本近代文学史（とくに明治期）の資料集めとその整理・それによる史的脈絡の跡づけということを意識的・積極的に行いはじめた。前掲の『早稲田文学』明治文学研究号刊行はそれの最初の達成であり、その後の研究にとって大きな刺激となるとともに直接の足場を提供するものとなった。

この意味では、専門的な日本近代文学史研究者による研究は大正末年から現在まですでに三十数年の歴史（研究史）をもつにいたっている、と言っていい。右のひとびとはその後、『明治文学叢刊』四冊（柳田泉）・『随筆・明治文学』正続（同）・『明治文学史』正続四巻（本間久雄）・『文芸東西南北』（木村毅）・『明治文学展望』（同）・『日本筆禍文献大年表』（斎藤昌三）・『明治文芸側面抄』（同）等々の今では近代文学研究史上の「古典」となっている諸著にまとめられている精力的な資料調査と史的脈絡の構想とによって、日本近代文学史研究の確実な基礎の確立者となったばかりでなく、今なおなんらかの形での活動を続けている。しかし、このようにしてはじまったばかりの大正末年の日本近代文学史研究界では、近代日本文学の高い嶺を形成する代表的な作家たち（二葉亭四迷・森鷗外・北村透谷・樋口一葉・島崎藤村・永井荷風・夏目漱石・田山花袋・志賀直哉・有島武郎・芥川竜之介等々）とその代表的な諸作品とについて、その内部に立入ってきめこまかに鑑賞し批評するという努力はまだどれほども行われるにいたらず、そういう鑑賞や批評と実証的な調査との上に立っての作品研究・作家研究・流派研究・文芸思潮研究等々をふくむ専門的な日本近代文学史研究は昭和四、五年ごろからの片岡良一・湯地孝・塩田良平らの登場をまたねばならなかった。百七十五頁にわたる湯地孝の「現代文学序説」と四百頁にわたる片岡良一の「現代文学諸相の概観」とを掲げた『国語と国文学』昭和四年四月の増大号「現代文学考察」という大冊は、東大の国文科系を中心に日本近代文学史研究の新しい領域が開かれたことを告知するものとなっている。ことに片岡の「現代文学諸相の概観」は、日本近代文学を近代の個人主義的な文学の発達史としてとらえ、複雑をきわめたその四十年間（二葉亭の登場から昭和初年まで）の歴史を、人間性と文学とのジグザグの発展として個々の作品や作家に具体的に立入りながら精緻に跡づけたものとして、日本近代文学史叙述の新たな段階の成立を示した。文学史、とは銘打たれておらず、「諸相の概観」というたてまえで書かれているから、個人主義文学としての日本近代文学の独自な諸性色の豊富詳細な分析と批判、近代日本の自我と文学的営為との屈折多い関係の具体的な照明、等にもかなりのスペースが割かれているが、それらを包括的で同時に個別的な文学史的な跡づけのなかで明らかにしているということは、文学史叙述の新しい実質が形成されたということであり、同じ片岡が岩波講座『日本文学』に書いた「日本文学史概説・明治時代」（昭和六年、のち増補されて中央公論社版『近代日本文学の展望』の巻頭に収録）はこうした基礎の上にはじめて可能となったものである。

「現代文学諸相の概観」は、相馬御風から宮島新三郎までにいたる前述の批評家たちによる近代文学史叙述に多くを負っていることは事実であるが、同時に、宮島の『大正文学十四講』（これは宮島の評論を木村毅らが補綴して文学史的な体裁をととのえたものである）と片岡の大正期文学史叙述の部分を比較して見ればただちに明らかになるように、粗雑で羅列的な性質のいちじるしい前者のにくらべて、後者のは大正期に日本近代文学が示した停滞とその中での芸術的豊熟の諸相―個人の真実と主観性への没頭、「常識」への嫌悪、気分と神経との支配、意志および主張というものの乏しさ、文学上のエコールの自覚や主張や文学運動やの弱さ、理論と客観的な批評との不振、それに代って「深い」とか「浅い」とかいう文壇的観念による裁断の流行、また個々の作品の中に見出される巧緻・繊細・幽暗・沈潜・末梢性等の特色、等々、これらがまさにその複雑さにふさわしい鋭く柔軟な感受性と思考とによってとらえられている。

東大国文科を中心とする日本文学研究上のアカデミズムは、さきに述べた国学的な観念と方法との支配ということもあって、近代文学の研究というものを長い間にわたって自己の領域の一部としては承認しないできた。その東大国文科研究室が編集する『国語と国文学』が「現代文学考察」というような大冊の特集号を出したということは、アカデミズムのなかでようやく日本近代文学研究が一つの重要な、回避しえない研究領域として承認されるにいたったことを示すものである。しかし、研究対象である近代文学そのものの性質からして、それを取上げて研究する者自身にもそれまでのいわゆる「国文学者」とはちがう近代文学的な感受性や観念や研究方法が必要であり、片岡はまさにそういうものを十分にそなえた研究者として登場したのであった。片岡は高等学校（旧制）に入学する前後から文芸評論を書いて『文章世界』等に投書し、後年の著『現代作家論叢』に収められた相馬泰三論などは早く大正九年ごろに岡野陽吉の名で『文章世界』に掲げられたものである。のち川端康成らとの交友のなかで文芸評論家としての道を進もうとしたこともあったが、同時代の作家たちにたいする個別的な批評的研究（志賀直哉論、里見弴論、佐藤春夫論、等々）を創刊当時の『国語・国文』（京都大学）や初期の『国語と国文学』等に発表しているうちに、しだいに近代文学研究の専門家として認められるにいたり、「現代文学諸相の概観」のような包括的な文学史叙述を実現するにいたったのである。右の志賀直哉論や里見弴論や佐藤春夫論はすべて昭和九年刊の『現代作家論叢』におさめられ、この本は大正文学研究の先駆的な業績としていまなお生命を保っている（戦後は思索社から再刊）。

日本の近代文学史研究は、柳田泉・本間久雄・木村毅らの流れと次いで現れた片岡・湯地孝・塩田良平らの流れとによって、研究としての確実な発展の道についた。湯地は鑑賞的な研究にすぐれ、塩田は実証的な研究に多くの関心を傾けていたが、両者とも片岡と同様に日本近代文学史の全体にわたる広い視野と個別的な立入った研究とによって、専門的な日本近代文学研究者として精力的に活動し、近代文学史研究の必要と意義とを明らかにするとともに若く新しい専門的な研究者の続出を刺激しまた育成に当った。昭和四、五年ごろから近代文学史研究の業績が一般にふえてくるのは、これらのひとの活動によるところが多い。そしてこの動向の中心に立っていたのは片岡であり、のちに『近代日本の作家と作品』にまとめられた

諸論文はそういうものとしてきわめて強烈な影響力をもつたのであった。さらに、昭和八、九年ごろから、プロレタリア文学運動の退潮にともなって、それまで有力だった観念――日本近代文学は「ブルジョア支配と結びついたブルジョア文学に過ぎぬ」という観念が崩壊するとともに、日本近代文学史についての立入った検討と再評価との必要が進歩的文学の潮流に立つひとびとから自覚されるようになり、それらのひとびと（神崎清や土方定一や篠田太郎らが代表的）による新方式の研究がさかんになったときにも、片岡の研究は決して色あせることがなかった。「現代文学諸相の概観」が近代文学を個人主義文学として把握し批判していたことは、その実際上の適用の見事さからして、個人主義を超える立場についての思想的な展望を背後にひめていたことを示している。その展望がどういうものであるかは直接には語られていないが、近代日本文学史上の作家と作品および作中に取上げられた日本人たちの生活にたいする近代的民主主義的な立場からのはげしい批判と主張とは、進歩的なリベラリストとしての立場を明瞭に前提としており、同時に、大正期的な繊細な人間理解と同情、人間の矛盾の処理しがたさへの鋭い自覚とあきらめ、それによって自他を（とくに他者を）ゆるす寛容というものの伴う無力感、等がからみ合っている点でプロレタリア文学系の研究者たちとはちがっていたが、日本近代文学史に一貫した近代的民主主義的な人間的要求とそれがあまりにもしばしば――というより全体にわたって――挫折や屈折や苦悩をよぎなくされていることをそのかくされた襞々にまで入って精緻に明らかにした点では進歩派の研究者の研究よりも永い生命をもっている論文がすくなくないのである。

片岡の近代文学研究者としての業績は、没後に刊行された『日本浪漫主義文学研究』（法政大学出版局）と『自然主義研究』（筑摩書房）とによって一応の完成に達した。文学史叙述としての『近代日本文学の展望』（中央公論社、のち三笠文庫）、明治・大正の作家作品論を中心とした『近代日本の作家と作品』（岩波書店）、明治三十年代までの浪漫主義文学の歴史を追及した『日本浪漫主義文学研究』（前掲）、自然主義文学の包括的個別的な研究としての『自然主義研究』（前掲）、大正文学研究としての「現代文学諸相の概観」と『現代作家論叢』（ともに前掲）、昭和文学研究としての『近代派文学の輪廓』（白楊社刊）、文学原理論（とくに批評の基準と研究の方法）としての『現代文学の基準』（大地社）――これが片岡の日本近代文学史研究の壮大な体系である。なおこれらのほかに、少年たちのための『芥川竜之介と有島武郎』その他の啓蒙的な著書があり、また近代以前の文学に関する研究書（『井原西鶴』等）がある。

こうした壮大な研究体系についての研究はこれからの仕事である。それは、日本近代文学研究史についての研究の最も大きな主題の一つになるとと同時に、こんごの日本近代文学研究にとって最も確実な足場の一つとなるであろう。